

京 都 光 華 女 子 大 学
研究紀要 第45号 抜刷
平成19年12月 5 日 発行

結婚と金

—*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*に
おけるサンディの戦略—

和 栗 了

結婚と金

—*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*に おけるサンディの戦略*—

和 栗 了

『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1889年出版、以後『ヤンキー』と略す）のハンク・モーガン（Hank Morgan）は自己中心的にすべてを語ろうとする。自分が六世紀の中心であり、すべて自分が決定し、改革したかのように語っている。

だが、実はハンクは六世紀の他の人物に上手く支配、監督されていたのではないだろうか。特に結婚に関して、ハンクは妻のサンディ（the Demoiselle Alisande la Carteloise、以後サンディ）に上手に誘導されたのではなかろうか。もし、サンディがハンクを手玉に取っていたとなると、この小説は従来とは少し違った読み方ができる。ハンクは本人が主張するほど自己完結的人物ではない。同時に六世紀の封建時代の中で女性がどう生きることが可能かという話になる。さらに、長編小説中でほとんど夫婦の姿を扱わなかったトウェインが『ヤンキー』ではハンクとサンディーをどのように描いたのかという主題となる。¹トウェインが書いた数少ない核家族の実例であるがゆえに、サンディとハンク・モーガン夫婦の描かれ方は重要なのだ。

—

『ヤンキー』のサンディはハンク・モーガンと結婚し、ハロー・セントラル（Hello Central）という子供をもうけた。彼女は六世紀の世界で圧倒的な力を

持つと考えられる「ザ・ボス」(“the Boss”)の妻としての地位を獲得したのである。少なくとも「サンドベルトの戦い」(“The Battle of the Sand-Belt”)の前まではハंकとサンディは、六世紀の人々に理想的夫婦と映ったことだろう。あるいは、十九世紀の夫婦のひとつの理想を実現したものと十九世紀の読者には読まれたかも知れない。² ハंकが結婚後、“Within the twelvemonth I became her worshipper; and ours was the dearest and perfectest comradeship that ever was.” (Ch. 41, 407) と告白する時、二人の関係は、ハंकの社会的地位と経済的安定の面から見ても、理想的だと言えるだろう。³

マーク・トウェインはもともと貧困層の結婚には否定的であった。貧しい人々が幸せな結婚をし、幸福な家庭生活を築いてゆくという物語を、トウェインは少なくとも書かなかった。初期の「カーソン近くの血生臭い殺戮」(“A Bloody Massacre Near Carson,” 1863年出版)では、ネヴァダの鉱山で失敗した一家族の悲惨な末路を描いた。『王子と乞食』(*The Prince and the Pauper*, 1882年出版)のトム・キャンティの家庭は極貧層の家庭が離散する例である。「三万ドルの遺贈」(“The \$30,000 Bequest,” 1904年出版)は貧しい夫婦が遺産を夢見て崩壊する話だ。

トウェイン自身が幸福な結婚をするために、必死に成りあがろうとし、失敗した時には、自分は結婚できないと嘆いた。⁴ 幸福な結婚や幸せな家庭生活は、経済的、社会的地位の安定の上に築かれるという信念をトウェインが持っていたことは明かだ。その原因はトウェインの父親の没落があったかもしれないし、ハンニバル時代に見聞した貧しい開拓地の実情があったかもしれない。いずれにせよ、トウェインの世界では結婚と金あるいは経済的成功は密接に結びついていた。つまり金持ちにならないければ幸福な結婚はできないと彼は信じていた。

トウェインのこのような信念を女性側から見ると、女性は経済力のある男を捕まえないければ幸福になりにくいことになる。経済的に安定した生活のほとんどが男性によって支えられていた十九世紀後半のアメリカ社会では、「いい男」は、金を持っている男性で、裕福な生活を与えてくれる男性、という図式があ

る程度成り立っていた。ついでに、その男性が政治的にも絶大な力を持っていたら申し分なかった。

従ってある程度以上の階層の女性が結婚を考える時、相手の身元や将来性を慎重に調べた。トウエイン自身調べられた側である。そのような女性たちは「いい男」を見つけようとし、見つけた場合にはある程度の慣習に従いながら、確実に手に入れようとした。

以上のような事情は、実は、すべてトウエイン自身の経験であった。トウエイン自身の経験から二つ例証する。一つ目はナンシー・ミリアム・ロビンズ (Nancy Miriam (Myra) Robbins, 1848-81) とトウエインの恋愛悲話である。愛称マイラと呼ばれるこの女性は、母親をスーザン (Susan Robbins)、父親はジェイムズ (James Kenyon Robbins) といった。父親はいくつかの堅実な事業に投資し、自身も事業を行っていたようだ。トウエインがマイラと知り合ったのはトウエインがミシシッピ河の水先案内人として働いていた時代、一八五八年から一八六一年であった。トウエインはマイラのためにわざわざ蒸気船を停止させて、ケーキを贈るほどの熱の入れようだった。トウエインが求婚すると、彼が水先案内人だという理由で父親ジェイムズは断った。つまり、トウエインが『ミシシッピ河の生活』(*Life on the Mississippi*, 1883年出版) の中で水先案内人をどれほど賞賛しても、水先案内人を立派な職業として認めない人はいたのである。そしてトウエインはそういう価値観の人々の中に入ろうとしていたのである。⁵

もう一つの例はオリヴィア・ラングドンとの婚約である。トウエインがオリヴィア・ラングドンに結婚を申し入れた際、自身の身元や行状を問い合わせる人物を数名指名させられた。⁶ ある程度以上の階級の人々の結婚に際しては当然の手続きだったようだ。トウエインは前カリフォルニア州知事やネヴァダ州知事の名前を挙げた。信頼に値することを示すのは大変なのである。

また、トウエインは将来性のあることも示さねばならなかった。講演や本の出版で安定した収入があることを示したが、それでもラングドン家の友人で、クリーヴランド『ヘラルド』紙編集長夫人メアリ・フェアバンクス (Mary

Mason Fairbanks) に助力を求めた：

And yet they [Mr. and Mrs. Langdon] are (sensibly) more concerned about what I am likely to be in the future than what I *have* been in the past. They think you could build up their confidence—I *know* that is why they so wish you were here.

(To Mary Mason Fairbanks, 26 and 27 November 1868, *Mark Twain's Letters*, Volume 2: 1867-1868, 284.)

一定階級以上の人物と結婚するにはいくつもの関門があり、それらを通過し、「いい男」であることを立証せねばならなかったのである。

オリヴィア・ラングドンに最初に手紙を書いた一八六八年九月七日から二ヶ月ほどすると、トウェインも彼女の愛情を確信した。トウェインはメアリ・フェアバンクスに、“That she loves me I would be a fool to doubt.” (To Mary Mason Fairbanks, 26 and 27 November 1868, *Mark Twain's Letters*, Volume 2: 1867-1868, 285) と書いた。年頃の男女が文通を始めること自体が一定の恋愛感情の表現であった時代である。二人は互いの感情を確認しつつ、手順を踏み、愛情を深めたのである。

オリヴィア・ラングドンとの結婚に関して、リサ・ウィリスやスーザン・ハリスの詳しい研究もあり、これ以上詳しく述べることは控えるが、トウェインが一方的に熱烈に求婚し、彼女はそれに応じざるを得なかったという主張は今では神話だ。⁷ オリヴィア・ラングドンはトウェインを選択し、その教養や魅力を総動員してトウェインという気鋭のジャーナリストを捕まえようとしたのも一面の事実だ。

オリヴィア・クレメンズとトウェインと同じように、理想的夫婦に見えるハंकとサンディが結ばれるまでには紆余曲折があった。最大の問題はハंकが六世紀の人々を最初から軽蔑していたことだろう。十九世紀のアメリカの白人男性と六世紀のイングランドの女性との間の価値観の違い、基本的な考え方の相違は乗り越えがたく思われる。例えば、サンディの身元は正確には分らない。彼女の言動から判断すると、彼女が貴族階級に属することはまず間違いな

い。だが、確証はない。彼女は貴族階級の仕来たりや慣習をよく把握しているというだけである。彼女の身元を保証する書類も人物もない。十九世紀人ハンの考えでは、身元不明のサンディは当然結婚相手にはならない。ハンの次のような言葉はまさに彼女に対する軽蔑だ。

“Don’t *understand*? Land of—why, you see—you see—why, great Scott, can’t you understand a little thing like that? Can’t you understand that the difference between your—*why* do you look so innocent and idiotic!” (Ch. 11, 90-91)

少なくともハンクがサンディを認めるようになるまでには時間と精神的隔たりがあった。

だが、ハンクは自分が六世紀の人々とはまったく別の存在だと考えているのではない。自分と六世紀の人々との間には程度の差しかないと認識している。彼の自己認識は、“I was just that kind of an elephant, and nothing more. I was admired, also feared; but it was as an animal is admired and feared” (Ch. 8, 65)なのである。

理想的な結婚をし、理想的な夫婦になることは、ハンク・モーガンのような「超人」的人物にとっても困難だった。その最大の難点はハンの葛藤であった。六世紀の人々に対する軽蔑心や嫌悪感と同時に、自分も彼らも大差ない人間だとする認識もある。二人の間の隔たりは大きい。

二

二人の間の隔たりをハンクに乗り越えさせるサンディ側の戦略は、彼女の貴族社会に関する知識と彼女の機転、そして彼女の性的魅力であった。

まず、彼女は貴族階級と騎士道の慣習に通じ、騎士の遍歴がどのように行われるか、知っていた。具体的には、四十四人の王女たちを救い出してほしいとアーサー王に訴えれば、それがどのように処理されるかをサンディは十分予想

できた。つまり、アーサー王が騎士と自分と二人だけで遍歴に出ることを命ずることはサンディにとって当然予想されたことだった。

サンディがアーサー王のもとに来た時に望んでいたことは、単に騎士と結ばれることだけだったかも知れない。ところが遍歴の相手がハンクだと分かった時からハンクに積極的に協力することが自分の地位の安定的確保に直結するとサンディが考えても当然である。「ザ・ボス」の称号を持つ、王国内で最高クラスの地位のある男性を得られるのである。さらに、女性を伴う騎士の遍歴が、ハンクが懸念する男女の危険な関係になることを、サンディは最初から予想、あるいは期待していたはずである。彼女の気持ちをハンクの侍従クラレンス（Clarence）がハンクに説明している。

“La, sweet your worship, one may lightly answer that, I ween. She will go with thee. They always do. She will ride with thee.”

“Ride with me? Nonsense!”

“But of a truth she will. She will ride with thee. Thou shalt see.”

“What? She browse around the hills and scour the woods with me—alone—and I as good as engaged to be married? Why, it’s scandalous. Think how it would look.”

(Ch. 11, 93)

ハンクが性的な問題が生ずることを指摘しているにもかかわらず、サンディは了解しているのだ。“will”という願望の意味を持つ助動詞が繰り返されていることから考えると、サンディはそれを望んでいるのだろう。そして、フロイデリアンが泣いて喜びそうな情景、二人が一緒に馬に乗る姿がこの後出現し、二人はどこかで結ばれたのである。

彼女の性的魅力について少し述べる。彼女がアーサー王のもとにやって来て、四十四人の王女たちを助けてほしいと訴えると、円卓の騎士がこぞって遍歴に出ることを望んだと語られている。彼女の容姿、いや少なくとも彼女の話が、騎士達にとって魅力的だったと推測できる。もちろん彼女には性的魅力があった。それを挿絵で確認したい。

これはハンクの甲冑を冷やしている場面だが、この挿絵は、次のようなドミニク・アングル（Jean Auguste Dominique Ingres、1780年～1867年）の「泉」（1856年、オルセー美術館蔵）を連想させる。



"SHE CONTINUED TO FETCH AND POUR UNTIL I WAS WELL SOAKED."

(Ch.12, 102.)



『ヤンキー』の挿絵とは鏡像関係にあるアングルの絵は全裸の女性である。蛇足ながら、アングルは「グランド・オダリスク」（「横たわるオダリスク」、1814年、ルーヴル美術館蔵）などの裸体画でも有名な画家である。この「泉」は女性の清らかな魅力を表現しているとも言えるが、性的な絵画でもある。サンディ、イコール「泉」の女性と直結はしにくい、トウェインはサンディの挿絵で読者にアングルの描く裸体の女性を連想して欲しかったのだ。サンディの容姿、さらに、彼女の性的魅力はいかに隠されていても、十分に連想される。

『ヤンキー』の挿絵の場面で、サンディが冷やしたのは甲冑の熱だけでなく、

ハンクの性欲も冷やしたのだと推定すると、この挿絵は想像力を刺激する。まず、アングルの女性は裸体なのに、サンディは服を着ていることから、性欲を抑制するには服が有効なのだろう。しかもその服にアメリカ合衆国を象徴する可能性のある星があることから、アメリカでは性欲の抑制は正しく行われていることを示していると考えられる。六世紀のイングランドのように性の乱れはアメリカにないと言いたいのだろう。さらに、兜がコンドームを連想させるとすれば、ハンクが兜も甲冑も身に着け続けることはまた別の意味を持つ。⁸ つまり、二人は親密な関係になったが、コンドームで避妊をしたのである。そして避妊をすれば親密な関係になってもよいではないか、それは性の乱れではない、という自分勝手なハンクの声も聞こえてきそうだ。

サンディとハンクの二人が結ばれた場所と時間は推定しにくい。もし遍歴の最中にハンクが甲冑を脱いでいたら、その時点だと言えるだろう。だが、テキストでは甲冑を脱いでいない。経帷子や甲冑は身に着けるだけでも大変であり、“I had the demon’s own time with my armor” (Ch.11, 94) と悪態を吐いているのだから、ハンクは脱ぐのかと思うと、脱がない。ハンクは一線を画しているのだ。それでも彼が引く一線はコンドームを装着することによる一線かも知れない。何れにせよ、上記の挿絵はかなり性的な意味を持ち、『ヤンキー』は性的な作品なのである。

サンディの知識と戦略に戻る。サンディは騎士の遍歴に同行することの危険性も了解している。つまり、遍歴に同行する以上、女性は騎士の所有物として扱われる可能性があることをわかっている：

But, said I, suppose the victor should decline to accept his spoil? She said that that wouldn’t answer—he must. He couldn’t decline: it wouldn’t be regular. I made a note of that. If Sandy’s music got to be too burdensome, some time, I would let a knight defeat me, on the chance that she would desert to him. (Ch. 16, 142)

騎士同士の決闘で勝つと、敗者の身柄も含めたすべての所有物を勝者が所有し

た。ハンクも最初に経験したとおりである。少なくともそれが慣例と考えられているとサンディはハンクに教える。

この情報に加えて、サンディが次のように主張をする時、サンディはハンクに忠誠を誓っていることが分かる：

“Will I be traitor to my knight, dost think? That were dishonor. I may not part from thee until in knightly encounter in the field some overmatching champion shall fairly win and fairly wear me. I were to blame an I thought that that might ever hap.”

“Elected for the long term,” I sighed to myself. “I may as well make the best of it.”
(Ch. 21, 194)

サンディは「我が騎士」を裏切らないと主張する。彼女の主張は騎士道の慣習に彼女が忠実であることと同時に、ハンクへの忠誠心も表している。やはりサンディは相手がハンクだからこそ積極的に協力しようと考え、その気持ちを伝えているのだ。

この二十一章の場面で、決闘で負ければ一緒に連れているサンディも取られてしまうという事実に対して、ハンクは冗談を交えて応じている。しかし、彼の本心はサンディを失いたくないのであり、二度と負けたくないという気持ちであったろう。

この推測を確認する前に、サンディの戦略にもう一度戻る。ハンクが遍歴の騎士と対戦する時、サンディは機転を利かせ、ハンクを勝利に導く。彼女は、相手の騎士に、対戦しようとしているのが「ザ・ボス」であると伝えるのだ。すると遍歴の騎士達はそそくさと逃げ出す。彼女は、迷信と評判に惑わされやすい騎士たちの精神構造をよく理解し、ハンクの魔術師としての名声を利用したのである。

同じように、モーガン・ル・フェイの城でも、サンディはハンクの身元をル・フェイに知らせることでハンクの命を救っている。ハンクはサンディを褒め、“How much better she [Sandy] managed that thing than I should have

done it myself! She was a daisy.” (Ch. 14, 123) と言い、“she had stood by me most helpfully in the castle, and had mightily supported and reinforced me with gigantic foolishnesses which were worth more for the occasion than wisdoms double their size” (Ch. 19, 174-5) と、サンディの存在を高く評価するようになる。

もし、サンディがハンクを嫌っていたら、ハンクに協力しなかったはずだ。ハンク以上に魅力のある遍歴の騎士に出会っていれば、サンディはむしろ黙って傍観することもできた。ハンクは背が高いことと十九世紀の知識があることを除けば、騎士として優れた点を持ってはいない。騎士として決闘をすれば負ける可能性が高い。ところが彼女は、ハンクが足りない騎士の遍歴に関する知識を補い、戦うことなくハンクを勝利に導き、同時にハンクからの評価も勝ち得たのである。ハンクを守り、勝たせようとするサンディの戦略は見事だ。サンディとハンクの二人は、まるで夫婦のようにうまく協力し合って難局を乗り切ったのである。

サンディの戦略は見事だ。アーサー王宮で最も大きな権勢を持つ騎士のハンクを手に入れるために、彼女は肉体的魅力をも利用した可能性がある。ハンクの知識を補い、ハンク以上の人間観察力を見せ、サンディはハンクを助けた。そしてハンクの「暑さ」を冷ましたサンディは彼をコントロールしているのだ。非の打ち所のない妻である。

三

より力の強い男がよりいい男だとしたら、ハンクは六世紀では最も理想的な男性と見做されたであろう。ただ、ここで問題になるのは、「力の強い男」、男らしさ (manliness) の定義である。言うまでもなく、十九世紀後半は「男らしさ」が問われた時代でもあった。もちろん「女らしさ」 (womanliness) も問われた時代だった。

『ヤンキー』の中では、まず肉体的「男らしさ」が何より強調されている。

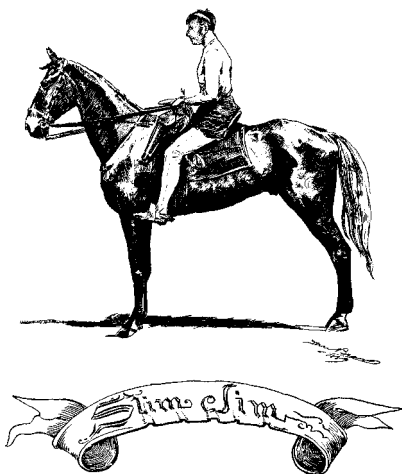
物語の最初にハンクが全裸にされ、明らかに彼の肉体上の男性性が表現されている。そして三度もハンクの全裸が挿絵に描かれている。⁹ 異常とも思える男性の肉体への執着だ。

さらに、『ヤンキー』ではスポーツ、特にボクシングによって肉体的「男らしさ」が表現されている。まず、ハンクを六世紀の世界に送り込んだのはヘラクレスのような男の一撃であった。これは明らかにボクシングを連想させる。さらに、“Man of brains—that is a thing they never think of. Tom Sayers—John Heenan—John L. Sullivan” (Ch. 15, 129) と、当時の有名なボクシング選手の名前が言及されている。十九世紀後半にはボクシングが「男らしさ」を表現するスポーツとして人気を得ていたし、トウェイン自身少しだけ経験したことがあった。¹⁰

さらに肉体的「男らしさ」を表しているのが、遍歴の騎士の対戦であり、馬上槍試合である。ハンクがサンディの助けを借りて、遍歴の騎士との戦いに勝ったことは先に述べた。アーサー王と二人で遍歴した時にはハンクはダイナマイトで相手を粉々に吹き飛ばした。馬上槍試合では、カウボーイの投げ縄と回転式拳銃を使って勝利する。

ところで、ハンクは長身ではあったも肉体美を自慢できる体型とはいえない。右の挿絵では均整の取れた馬に跨るハンクの姿がいかに貧弱に見えてならない。

ハンク自身が認めているように、彼は十九世紀のアメリカ合衆国ならどこにでもいそうな男であり、彼よりも屈強でヘラクレスのような男も十九世紀では珍しくないのだ。ハンクは肉体的男らしさに対して劣等感を持っていたと言えよう。



(Ch. 38, 381)

それで肉体面での男らしさに対して、ハंकは知的な「男らしさ」によって対抗しようとした。たとえ彼の勝利がサンディの協力や投げ縄や拳銃によるものだとしても、彼の勝利はハंक流の「男らしさ」の勝利であった。それがハंकの十九世紀の「進んだ科学知識」でありテクノロジー礼賛であり、十九世紀人としての彼の自負心であった。

肉体的な「男らしさ」とハंक流の「男らしさ」との対立が最も鮮明になるのが、サンドベルトの戦いである。彼は高压電線を張り巡らし、男らしさの象徴の甲冑を身に着けた騎士たちを感電死させる。さらにガトリング機関銃で銃殺する。一つの男性性の象徴の甲冑に、もう一つの男性性を示す機関銃で穴を開けるのである。拳銃や機関銃が男性性を象徴することは言うまでもない。ハंकは彼流の男らしさで六世紀の騎士たちに完全に勝利したと主張したいのである。彼の主張によれば、一つの型の「男らしさ」が別の「男らしさ」に勝利したのである。

騎士全員を相手に戦って勝ったハंकのスローガンは、共和国の樹立だった。しかし同時に彼の勝利は騎士同士の対戦が消滅したことをも意味し、サンディを他の騎士に奪われる可能性がなくなったことを示している。ハंकの共和制樹立という大義の根底には、サンディを奪われたくないとする男としての欲望があったとも考えられるのだ。つまり、ハंकは彼流の「男らしさ」を発揮して、サンディとの生活を守ったとも考えられる。

さて、この小説の「前置き」でマーク・トウェインは、フランス王ルイ十五世 (Louis XV, 1710-74) の愛人ボンパドール夫人 (Marquise de Pompadour (*Jeanne Antoinette Poisson Le Normant d'Étioles*), 1721-64) とイギリス王チャールズ二世 (Charles II, 1630-85) の愛人キャッスルメイン夫人 (Lady Castlemaine, 1641-1709) を取り上げ、彼女らが王権を篡奪したかのように非難している。男性による王位篡奪の問題を『王子と乞食』で既に扱った著者は、『ヤンキー』ではむしろ権力者の結婚と愛人問題、それから生ずる国と社会の乱れを取り上げたと読める。つまり、女性が権力者を手玉に取り、絶大な力と富を手に入れる可能性があったのである。だとすれば、この小説はサンディがハ

ンクとの結婚によって、権力と金への道をどのように進んだか描いたとも読める。

だが、もちろんサンディは権力欲を発揮する女性とは描かれておらず、政治的にハンクを利用した女性とも書かれていない。むしろ彼女は育児と家庭生活に専念している。グレンナ・マシューズが論ずるように、十九世紀が家庭生活の時代であり、その中心に主婦がいたとしたら、サンディはそうした主婦の一人だった。結婚後のサンディは実に目立たないのだから。

また、この小説は、男性と女性の性的関係の乱れた世界を舞台にしている。アーサー王の宮廷では、アーサー王の王妃グィネヴィアとラーンスロットとの、「不倫」関係は皆が知っている。騎士は遍歴の途中で獲得したものを特定の高貴な女性に献ずるが、騎士と同行している女性も奪われたのであり、より強い男性と性的関係を結ばざるを得なかったのである。一夫一婦制の夫婦関係を土台とし、核家族を基本としていた十九世紀アメリカ社会の価値観からはかなり異なる性のモラルである。¹¹

そしてこの点でもサンディはグィネヴィアとは対照的だった。ハンクが“Ah, Sandy, what a right heart she had, how simple, and genuine, and good she was! She was a flawless wife and mother” (Ch. 41, 406) と断じているとおりだ。ハンクのこの主張を覆すだけの証拠はテキスト内にはない。

サンディが自己の権力欲のためにアーサー王の国を滅ぼしたのではない。サンドベルトの戦いでハンクは騎士達二万五千人をほぼ全滅させた。その大量殺人の根本的理由がサンディを奪われたくないとするハンクの個人的欲望だとすれば、ハンクは人類史上最悪の暴君に匹敵する。ハンク・モーガンはサンディという女性を所有し続けるために、家庭を守り続けるために、アーサー王の国のほとんどの騎士を殺害し、国を滅ぼしたのだ。

サンディは女性としての機略を用いて、権力者ハンクと性的関係を結び、結婚し、安定した生活を手に入れた。したたかであると同時に、力をもつ男と組まなければ生きていきにくい時代にあった女性の悲哀をサンディは表現している。一方、ハンクは一女性のために大量虐殺者になり、国を滅ぼし、自らをも

減ぼした男である。トウェインはこの小説でも女性を賛美しているのだ。

Works Cited

Degler, Carl N. *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present*. Oxford: Oxford University Press, 1980.

Harris, Susan K. *The Courtship and Mark Twain*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.

Matthews, Glenna. *“Just A Housewife.”* Oxford: Oxford University Press, 1987.

Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court*. (The Mark Twain Library) Berkeley, California: University of California Press, 1979.

———. *Mark Twain’s Letters, Volume 1: 1853-1866*. Eds. Edgar Marquess Branch, Michael B. Frank, and Kenneth M. Sanderson. Berkeley, California: University of California Press, 1988.

———. *Mark Twain’s Letters, Volume 2: 1867-1868*. Eds. Harriet Elinor Smith and Richard Bucci. California: University of California Press, 1990.

———. *The Prince and the Pauper*. (The Mark Twain Library) Berkeley, California: University of California Press, 1979.

Willis, Resa. *Mark Twain and Livy: The Love Story of Mark Twain and The Woman Who Almost Tamed Him*. New York: Atheneum Publishers, 1992.

* 本論は、関西Mark Twainの会第121回例会（福井大会）シンポジウム「Mark Twainと^{かね}金（Mark Twain and Money）」において、「結婚と金と地位と：『ヤンキー』におけるサンディの戦略」と題して口頭発表した原稿を書き換えたものである。

注

- 1 核家族の夫婦の日常を中心に扱ったトウェインの作品には、以下のような「マックウィリアム三部作」と呼ばれる作品群がある。

“Experience of the McWilliams with Membranous Croup” (1875)、“Mrs. McWilliams and the Lightning” (1880)、“The McWilliamses and the Burglar Alarm” (1882)。

- 2 トウェインとオリヴィア・ラングドンが理想的な夫婦であった可能性は高い。十九世紀後半のアメリカ社会の中流の人々の結婚については、Glenna Mathews, “*Just A Housewife*” (Oxford: Oxford University Press, 1987) を参照。

なお、本論では、マーク・トウェインの妻になった女性のことを、結婚以前はオリヴィア・ラングドン (Olivia Langdon)、結婚後はオリヴィア・クレメンズ (Olivia Clemens) と表記する。

- 3 テキストには、Mark Twain, *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (The Mark Twain Library. Berkeley, California: University of California Press, 1979) を用いた。以後この版からの引用は、括弧内に章番号とページ番号を記す。

- 4 トウェインは自分の結婚の可能性について次ぎのように書いている。

Marry be d—d. I am too old to marry. I am nearly 31. I have got gray hairs in my head. Women appear to like me, but d—n them, they don't love me.

(To William Bowen, 25 August 1866. *Mark Twain's Letters, Volume 1: 1853-1866*, 359).

- 5 トウェインが恋し、結婚を望んだ女性は、少なくとも三人いる。ここで取り上げたナンシー・ロビンス (Nancy Miriam Robbins)、エムマ・ロウ (Emma Comfort Roe)、ローラ・ライト (Laura M. Wright) である。彼女たちとトウェインが出会い、別れたのは、トウェインが、見習い時代も含めて水先案内人として働いていた時代である。

- 6 トウェインは将来の義父に宛てた手紙で次ぎのように人物照会先を付け加えている。

I wish to add to the references I gave Mrs. Langdon, the following: Hon. J. Neely Johnson, Carson City, Nevada. [...] Then there is the present Governor of Nevada, H. G. Blaisdel—he has known me four or five years— [...] And I give you, also, Joseph T. Goodman (reared in Elmira, I believe,) proprietor & chief editor of the “Daily Enterprise,” Virginia City, Nevada & C. A. V. Putnam, his newseditor [...]. (To Jervis Langdon, 29 December 1868, *Mark Twain’s Letters, Volume 2: 1867-1868*, 358).

- 7 Resa Willis, *Mark Twain and Livy: The Love Story of Mark Twain and The Woman Who Almost Tamed Him* (New York: Atheneum Publishers, 1992)、Susan K. Harris, *The Courtship and Mark Twain* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996)。

- 8 トウェインがコンドームを使用していた可能性は十分にある。というのは、友人のフランク・フラー (Frank Fuller) に次のようにコンドームを送ってくれるように依頼しているのだから。

Speaking of “courses,” I have mine, now. Please forward one dozen Odorless Rubber Cundrums—I don’t mind them being odorless—I can supply the odor myself. I would like to have your picture on them.

(To Frank Fuller, 15 August 1868. *Mark Twain’s Letters, Volume 2: 1867-1868*, 240).

- 9 物語最初の部分でハンクの全裸が描かれている挿絵は、以下の三枚である。裸に近い挿絵は、物語全体で、あと数枚ある。



(Ch. 4, 30)



(Ch. 5, 36)



"OH, BEWARE! THESE ARE AWFUL WORDS!"

(Ch. 5, 39)

10 トウェインは、ヴァージニア・シティ『テリトリアル・エンタープライズ』紙副編集長のジョージ・ドーソン (George F. Dawson) と一八六四年四月にボクシングの練習試合を行い、すぐに打ち倒された。*Mark Twain's Letters, Volume 1: 1853-1866*, 304-305 ページ参照。

11 アメリカ合衆国は植民地時代から核家族を中心とした社会だった。デグラー (Carl N. Deglar) は次のように述べている。

“in the day-to-day life of the family in western Europe and North America since at least the Reformation, the nuclear family has been the primary familial experience of the average person” Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present* (Oxford: Oxford University Press, 1980, 5.

